

特集「英語教育はどうあるべきか」 Part 1

「< 聞く・話す > コミュニケーション能力」の育成

渡辺 時夫

(信州大学)

1. はじめに

過去3回の学習指導要領の変遷を見ると、聞く・話す能力の育成を強調し、「実践的コミュニケーション能力」の育成へと着実に進んできたことがわかる。この間、聞く能力と話す能力との関係が微妙に変わってきたことは注目に値する。昭和56年度の改訂では聞くこと・話すことというひとつの Kategorie として扱われていたものが、平成2年度の改訂では、聞くことが話すことから独立し、聞くことの重要性が一層強調された。しかし、聞くことの言語活動の内容は、「語句や文の意味を正しく聞き取ること。数個の文の内容(まとまりのある文章の概要や要点)を聞き取ること」など、聞くという活動を他の skills から切り離して考えるにとどまっていた。だが、実践的な言語使用場面では、テレビを見るなど特別な場合を除き、他の skills と関連して用いられるのが普通である。今回の改訂ではこの点がはっきり記述されている。

たとえば言語活動の欄で、聞くことと他の skills(話すこと、書くこと)との関わりが次のように記述されている。(下線は筆者)

< 聞くこと >

質問や依頼などを聞いて適切に応じること。

話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。

< 話すこと >

聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。

< 書くこと >

聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書いたりすること。

最近の言語習得に関する研究成果を考慮に入れると、コミュニケーション能力を育成するために

は、聞く機会を増やし、話す書くなど他の skills と関連させながら学習者主体の授業を進めることが肝要である。

さて、従来の活動が、機械的なドリルに偏りがちであった点も改めなければならない。コミュニケーション能力の育成にあたっては、学習者が「伝達すべきメッセージ」を所持していることが前提である。メッセージの中身は、中学生の知的レベルにふさわしいものでなければならない。題材の重視を標榜している *NEW CROWN* は、コミュニケーション能力の育成においても「メッセージ」性を最も重視して取り組んできた。しかし、内容が豊かで複雑なメッセージを理解したり、発信したりできるようになるためには、段階を追った合理的な指導が必要である。聞く力の育成には、英語学習を通して考える生徒を育てることが最も大切であり、そのために生徒の知識や感性を大切にしつつ、top-down approach を多用することが重要である。

次に、「聞く・話す コミュニケーション能力」の育成について、上記の考え方を *NEW CROWN* はどう生かしているか、具体例を挙げて述べてみたい。

2. 具体的な指導例

(1) top-down approach

(説明の大枠をつかむことから始め、次第に細かい情報を正確に聞き取っていく指導法)

listening speaking 2年生の教材から
ねらい

CD(テープ)で、3名の科学者に関する英語の説明を聞き、彼らの出身地や業績などを考える。

指導法

科学者に関する英語の説明を CD で聞き、だ

れのことを説明しているかを把握させる。それ以上の情報は求めない。(3名の科学者の顔写真と名前を与えておく 生徒にとってなじみのある科学者なので、あらかじめ説明の中身が予測できる 予測しながら聞くという習慣・方略を習得することは大切なことである)

CDを繰り返し聞きながら、科学者一人ひとりについて、ひとつずつ事実を明らかにしていく。次のように、考える視点を提示しておくとうい。

(a) 出身地 (b) 何を研究したか (c) 業績などと の課題を解決するために何度も聞く機会があり、全部では相当な量の input となる。たとえば Graham Bell についての説明は次のとおり。

The third scientist is from Scotland. He wanted to study sound. He made a machine to carry sounds. It was new and untested. One day he accidentally dropped water near it. He shouted, " Mr Watson, come here! Help me! " Mr Watson was far away. The machine carried the shout. This was the first telephone. Who is he?

説明に用いられたすべての語句を理解する必要はない。下線を施した語句に気づき、自分の知識を援用すれば問題が解決できる。

ベルの出身地や業績などがわかったら、speaking へと移っていく。(ペア・ワーク)

課題

G. Bell になったつもりで A さんと対話してみよう。(下線部は解答例)

A : Where are you from?

Bell : I'm from Scotland.

A : What did you study?

Bell : I studied sound.

A : What did you do?

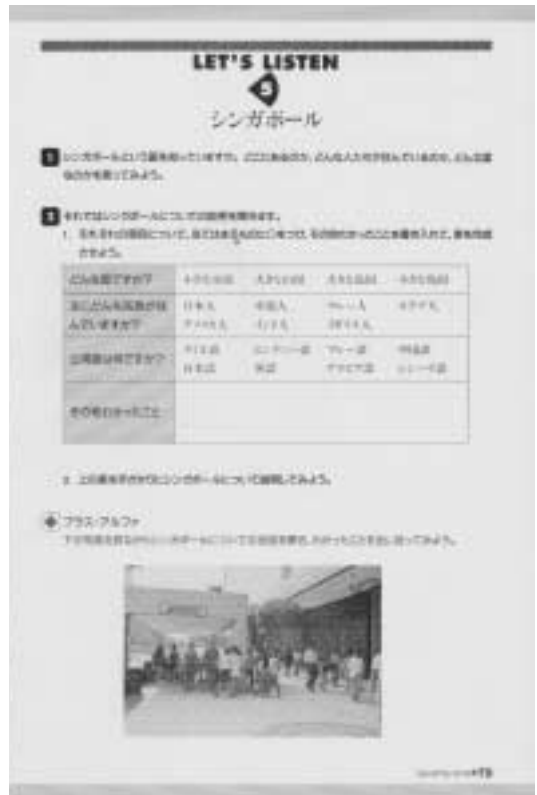
Bell : I made the first telephone.

ペア・ワークのあと、余裕のある生徒には、Bell になったつもりで、(a)自己紹介をさせたり、(b)新たに有名人を選んで紹介させたりする。

(a)の例 : My name is Graham Bell. I'm a scientist. I'm from Scotland. Watson is one of my good friends. I studied sound. I made the first telephone and I became very famous.

このような指導を行えば、聞く活動を話す活動へとつなげる strategy も習得できると思う。

(2) brainstorming listening expressing creative ideas 3年生の教材から



Book 3, LET'S LISTEN 5

ねらい

シンガポールについて自分の知識を整理し、新しい情報を得ることにより、シンガポールに関する自分のイメージを変え、理解を深める。

指導法

地理的な位置、民族、言語、文化などの観点から自由に日本語で発言する(brainstorming)

イメージが描けるようになった頃を見計らって、シンガポールに関する英語の説明を聞く。説明文の一部(解答欄に出ていない情報の部分)

People in Singapore can listen to the news in all the four languages. Singapore is a young country. It became independent in 1965. So it is only a little more than 30 years old.

聞いてわかることが主体なので、答え方そのものはやさしくし、マルチョイ式。

個に応じた反応もできるよう、「その他気付いたこと」を書き留める欄を用意する。解答は、日本語でもよいことにする(メモ程度でよい)。

既知の情報と新情報を組み合わせ、理解を深めること(考える力の育成)が期待できるだけでなく、英語での表現力とも徐々に関連させることが可能になる(聞いてメモを取るにより、音声表現に限らず文字表現の向上にもつながる)。

予想される解答

a young country, only 30 years old, news are given in all the official languages, Singapore is a democratic country, etc.

まとめた英文をグループ内で発表させることで互いに学び合い、視野を広めることができる。こうすれば 聞く ことから 話す 活動へ比較的自然的に、しかも楽しく移行することができる。

(3) speaking の活動

上の活動は主として < listening から speaking へ > という形だったが、*NEW CROWN* には 話す 活動を主体にした LET'S TALK という活動がある。文法が中心ではなく、「言語の使用場面」や「言語の機能」をクローズアップさせている。英語で表現しようとする、「こういう場合は何と言ったらいいだろう?」という発想が先に立つ。このような課題を解決する力こそまさに、実践的コミュニケーション能力なのである。たとえば「友達にポスター作りを頼みたい」のだが何と言ってお願いしたらいいだろう、とが「友達に物を借りたい」のだが何と言ったら貸してくれるだろうか、という場面で英語をうまく使えばコミュニケーションが成功する。このような力の育成を目指したのが LET'S TALK である。2年生の LET'S TALK 2 を例に挙げて、指導方法を説明してみよう。

Ken: I'm very busy now. I'm preparing the posters for Sports Day. Will you help me?
 Mukami: OK. What can I do?
 Ken: Please paint this picture.
 Mukami: May I use these brushes?
 Ken: Yes, please.

Book 2, LET'S TALK 2 モデル文

テープで対話を聞いたり、文字で読んだりして理解する。

次に、ペアを組んでロールプレイを行う。

どんな場面でどのような表現を用いることが望ましいかを実際の対話を通して学んだ後、次の基本表現を覚える。

1) A: Will you help me?

B: OK. / I'm sorry. I can't. (I'm busy now.)

2) A: May I use the brushes?

B: Yes, please.

下線部分に次の語句をあてはめて練習する。(やや機械的な練習になるが、これが基礎・基本の習得にあたる)

1) sit down / come with me / say that again

2) come in / borrow your bike / use the telephone

task を行う(実際の場面で、自分の本当の願いを聞き入れてくれる友達探しをする)。

まず、友達の助けが欲しいことがらを書き出し、その表現方法を次のように書き出してみる。

(a) teach math to me(Will you teach math to me?)

(b) join my club(Will you join my club)

自分の願いを受け入れてくれた人の名前(複数)をメモし、グループ内やクラス全体に発表する。

(例) Takao will teach math to me.

Mamiko will join my club.

授業の流れを次のように整理することができる。

モデル対話を聞く(読む) ロールプレイにより場面と表現の結びつきについて理解を深める 基本表現を複数覚える 実際の場面で自分の問題を解決するために覚えた表現を使ってみる。

小論の最初で述べたように、聞く 話す 読む などを関連させながら、コミュニケーション能力を育ていけるように工夫を凝らしている。

3. おわりに

紙幅に制限があり、一部の事例を扱っただけだが、上記の考え方と指導法により LET S LISTEN と LET S TALK を利用すれば、生徒の実践的コミュニケーション能力は飛躍的に向上するものと思う。